

中世末期日本語の～タにおける主格名詞の 制限について

——終止法で状態を表している場合を中心に——

福嶋 健伸*

キーワード：～タ、主格、主語、有情物、非情物

要 旨

中世末期日本語では、終止法で状態を表している～タがある。従来の研究では、このような～タの主格名詞に関して有情物の例があるということは、事実上、指摘されているが、有情物の例に限定されているか否かという観点からの言及は曖昧なままであった。そこで、本稿では、この問題に明示的な結論を出すために、終止法で状態を表している～タに関して、格助詞「ガ」で表示されている主格名詞が、有情物か非情物かを調査した。また、同一資料中の～テイル・～テオルにも同様の調査を行った。本稿の調査から、終止法で状態を表している～タの主格名詞には非情物の例もあることがわかり、また、～テイル・～テオルの主格名詞には非情物の例がないことが確認できた。このことから、主格名詞の有情物/非情物に関する分布は、終止法で状態を表している～タと、～テイル・～テオルとで明確に異なっているといえる。

1. はじめに

中世末期日本語において、終止法の～タは既に過去を表す用法を獲得していた。この点は、現代日本語の～タと同様である。しかし、次の例のように、終止法で現在の状態を表していると解釈できる～タの例もある。(必要に応じて [] 内に場面・解釈などを注記した)

- (1) あのみみのきつとしたは、其まま女共が耳ににた、又あの目のくりとしたもにたよ [自分の妻の顔と似ている鬼瓦を見ながらの発話] (虎明本・鬼瓦)

* e-mail address: fukusima@lingua.tsukuba.ac.jp

- (2) しらぬものにことばをかくるものか、しつた [私はあなたのことを知っている] (虎明本・磁石)

これらの例は、現代日本語で解釈する場合、「似ている」「知っている」のように現在の状態として解釈される。このような例は、現代日本語の終止法の～タには見られないものである。上記(1)(2)のような～タは、現在の状態を表すという点において、～タの前身である～タリに近いと考えられ、過去を表す～タと、現在の状態を表す～タリの中間的な存在として捉えることができる。

このような～タについて考察することは、「現代日本語の～タはどのような過程を経て成立したのか」という問題や、「日本語のテンス・アスペクト体系はどのように変化してきたのか」という問題を考える上で重要である。

上記(1)(2)のような～タの存在は、湯澤 1929 をはじめとする先行研究で既に指摘されており、この種の～タ（以下、単に「～タ」とする場合がある）を考察対象として調査を行った研究に高山 1995 がある。高山 1995 は、主に狂言台本を調査資料として考察を進め、虎明本と虎寛本を比較し、詞章間に「タからテイル」へと変質する動きを捉えた上で、虎明本の～タを、柳田 1991 が示した次のような図の中に位置づけている。

- (3) 室町末期江戸初期の進行態・已然態表現 (高山 1995、p.7)

有情物		非情物		
テ	テ	テ		進行態
オ	イ	ア		
ル	ル	ル		
テ	テ	テ(ママ)		已然態
オ	イ	イ(ママ)		
ル	ル	ル		

(ママ)

高山 1995 の図で「テイル」になっている部分は、柳田 1991 の当該の図(柳田 1991 の p.217 の図 4) から考えて、「テアル」の誤りと判断した。この(3)の図は、高山 1995 の論述からみて、「当該の～タには、有情物を主格とする已然態を表している例が

ある」ことを示しているとみられ、状態を表している～タのアウトラインを把握する上では非常に重要なものである。しかし、上記の(3)の図では、見方によっては、「～タの主格名詞は、(～テイル・～テオルと同様に) 有情物に限られている」という位置付けにも見える。

ただし、高山 1995 には、上記(3)の図以外に、～タの主格名詞に関して明確な言及はない。よって、この段階では、「～タの主格名詞は、(～テイル・～テオルと同様に) 有情物に限られている」のかどうか曖昧であり、この点に関しては現象の確認が必要であると思われる。なぜなら、状態を表している～タには、次にみる(4)～(7)のような例が存在するからである。

(4) それ左の手があいたは (虎明本・昆布売)

(5) 名をばいゑいゑによつてつくる字が、さだまつたというが、
(虎明本・比丘貞)

(4)の例は、大名が昆布売の左手があいていることを指摘する場面である。大名が発話する前から、昆布売の左手は空いたままの状態であり、この「あいた」は現代日本語で解釈する場合、「空いている」と解釈される。この例の主格名詞は「手」であると考えられるが、「手」が有情物であるとは考えにくい。同様に、(5)の「さだまつた」は、現代日本語で解釈する場合、「定まっている」と解釈されるが、主格名詞である「字」は、有情物とは考えられない。

さらに次のような例もある。

(6) やきばは、霜月しはすの比、氷のうへに、うす雪のふりかかつたことくで、
物うちからうへへは、くわつくわつとみだれた (虎明本・長光)

(7) 石上の松は座禪の僧に似たよ (醒睡笑・巻八)

これらの例では、「ガ」や「ノ」のような格助詞によって表示されている主格名詞はない。しかし、(6)の例は、刀の焼目を描写している例であり、(7)の例は、「石上の松は座禪をしている僧に似ている」ということを述べている例である。よって、いずれの例も有情物の主格名詞を想定することは難しいといえる。

これらの例から、～タの主格名詞が、～テイル・～テオルと同様に有情物に限定されているといえるのか疑問であり、この問題は当時の資料に即して検証する必要があると思われる。終止法で状態を表している～タが、非情物の状態を表せたのか

否か確認するために、この点をはっきりさせておく必要があるだろう。

本稿では、終止法で状態を表している～タの主格名詞に関して、有情 / 非情という観点から調査を行い、同一資料中の～テイル・～テオルとの比較から、次のような結論を示す。

- (8) 格助詞「ガ」で表示されている名詞の有情 / 非情について、中世末期日本語の資料を調査してみると、～タには、主格名詞が非情物の例もある。一方、～テイル・～テオルには、主格名詞が非情物の例はない。よって、主格名詞の有情 / 非情に関して、～タと～テイル・～テオルとは明らかに傾向が異なっている。

本稿の構成は次の通りである。まず、第 2 節で調査の概要について述べる。次に第 3 節で調査結果を示す。最後に第 4 節で本稿の結論をまとめる。

2. 調査の概要

本節では、調査の概要について述べる。本稿では、中世末期日本語の資料として、『狂言台本虎明本』『天草版平家物語』『天草版伊曾保物語』『醒睡笑』『きのふはけふの物語』を調査する。ただし、『狂言台本虎明本』の風流之本、万集類は調査対象外としている。また、和歌・語り・謡等の例も調査対象外としている。

採集する形式は、～タ、～テイル（～テイタ）、～テオル（～テオッタ）である。今回の調査では、現代日本語で解釈する場合において、～テイルもしくは～テアルで解釈しなければ不自然な例のみを、状態を表している～タとして採集した（実際の用例の解釈に関して多少の揺れが出る可能性はあるが、本稿の主要な趣旨を動かさない程度のものであると判断している）。当該の～タや～テイル・～テオルに、尊敬などを表す助動詞・補助動詞が含まれている例も基本的に調査対象としている。また、～テイケリ等の例が若干あったがこれらは調査対象としている。ただし、金水 1997 等の記述から、～タリの接続した形である～テイタリの例は、～テイルと別に扱う必要があると判断し調査対象から外した。～テイルのイルが明らかに「入る、座る」であると判断できる例は調査対象から外したが、判断に迷う場合は調査対象とした。したがって、～テイルの用例数は若干多めになる。

なお、統語的な条件について述べると、～タに関しては終止法に限定しているが、～テイル・～テオルに関してはそのような制限を設けていない。これは、～タは終

止法を調べるだけでも非情物の主格名詞があるのに対し、～テイル・～テオルは終止法ばかりでなく非終止法を調べても非情物の主格名詞は見つからない、という違いを確認するためである。

また、主格名詞に関して述べると、今回の調査では、～タや～テイル・～テオルの述部に対して、主格を表す助詞「ガ」で表示されている名詞に限定して情の有無の調査を行った。つまり、格助詞「ノ」で表示されている場合^{*1}や、格助詞がない場合、また「ハ」「モ」等で示されているいわゆる題目語の類は除いている。本稿の関心の範囲からすると、格助詞「ガ」で表示されているものを調査するだけで成果があると判断している。

3. 調査結果

調査の結果、終止法で状態を表している～タの例として、延べ 135 例が採集できた。この 135 例中、格助詞「ガ」で主格名詞を表示している例は 23 例あり、そのうち、10 例は主格名詞が非情物と考えられる例である。以下に具体例を示す。

- (9) おとがひがさしでた[相手の身体的特徴を述べている。顎がしゃくれているという意味] (虎明本・今参)
- (10) ふるはが二三枚のこつた (虎明本・鞍馬参り)
- (11) 其お手もとが、むごひほど似まらした[大名の手もとが大名の父親に似ていることを述べている] (虎明本・二千石)
- (12) 季が違ふた (きのふはけふの物語)

これらの例の「おとがい」「ふるは（古齒）」「お手もと」「季」は、非情物と判断できるだろう。

一方、～テイルの例は、終止法と非終止法の例をあわせて、延べ 240 例、～テオ

*1 中世末期日本語で主格を表している「ノ」は、「準体句内・連体句内・順接条件句内に用法的に集中する（野村 1993、p.28）」という指摘がある。今回は、終止法で状態を表している～タの主格名詞を調査するので、格助詞「ノ」で表示されている名詞は調査対象から外している。

ルの例は、終止法と非終止法の例をあわせて、延べ 13 例採集できた^{*2}。～テイルと～テオルの数を合わせると延べ 253 例である。このうち、格助詞「ガ」で主格名詞を表示している例は、～テイルで 24 例、～テオルで 1 例あり、合計 25 例あった。ここで重要なことは、この 25 例の中に、(9)～(12)のような主格名詞が非情物と考えられる例は存在しないということである^{*3}。～テイル・～テオルにおいて格助詞「ガ」で示されている主格名詞の例は、次のように有情物と考えられる例ばかりである。

- (13) いや是に一のたなとおほしき所に、女がまいつているよ、 (虎明本・連尺)
 (14) 河尻に源氏どもが多う浮うでいまらす (天草版平家物語)
 (15) おほきな牛があせつておつて、 (虎明本・法定)

ここに、～テイル・～テオルと～タの明かな違いが見て取れる。～タと～テイル・～テオルについて、格助詞「ガ」で主格名詞を表示している例の延べ数と、その中で主格名詞が非情物の場合の延べ数をまとめて示すと次のようになる。

(16)	格助詞「ガ」で主格名詞を表示している例の延べ数	主格名詞が非情物の場合の延べ数
～タ	23	10
～テイル・～テオル	25	0

この(16)から、～タと～テイル・～テオルとで分布が異なることは明かだろう。

4. 本稿の結論

本稿の調査から、中世末期日本語の終止法で状態を表している～タの主格名詞は、有情物に限定されていないことが明らかになった。第 3 節の調査結果からすれば、状態を表している～タと、同じ時代の～テイルや～テオルとで、傾向が異なってい

*2 ～テオルの用例数が少ないことは、この～テオルという形式が、～テイルに対して、卑下・軽卑の表現となっていたことに関係があると思われる (柳田 1990 参照)。

*3 非情物が擬人化されていると考えられる例が 1 例あった。

ることは明かである*4。

今回採集した用例から考えると、終止法で状態を表している～タには、主格名詞が非情物の場合もあると判断できるだろう。

本稿の結論を述べると次のようになる。

(17) 〈本稿の結論〉

格助詞「ガ」で表示されている名詞の有情 / 非情について、中世末期日本語の資料を調査してみると、～タには、主格名詞が非情物の例もある。一方、～テイル・～テオルには、主格名詞が非情物の例はない。よって、主格名詞の有情 / 非情に関して、～タと～テイル・～テオルとでは明らかに傾向が異なっている。

歴史的に考えてみても、～タの前身である～タリの主格名詞が有情物に限定されていたわけではない。また、現代日本語の～タの主格名詞が有情物に限定されているわけでもない。さらにいえば、中世末期日本語で過去を表している～タの主格名

*4 この注では、「ハ」等で表される題目に関して述べておきたい。今回の調査では、主格名詞が非情物である～タの例において、(9)～(11)のように、「おとがひ」「ふるは(古歯)」「お手もと」等の人体の一部を表す名詞が比較的多く見られた。このような場合、「おとがい」等の持ち主は有情物(主に人間)である。よって、非情物が格助詞「ガ」で表示されている～タの例において、次の例のように「ハ」で表される題目を想定したとすると、題目に用いられる名詞には有情物が多い、という観察は成り立つだろう。

・(オマエハ) おとがひがさしでた (9)改

しかし、冒頭でみた(6)や(7)のような例において、「ハ」や「ヘハ」で表示されている名詞は明らかに有情物ではない。そして、これらの例に、有情物の題目を想定することは極めて難しい。

加えて、次のような例にも、有情物の題目を想定することは困難である。

・まつはしたたかなるなしじや、身どもが所といかうちがふたよ、[家の造りが自分の所と大変違っていることを述べている] (虎明本・鶏髯)

さらにいえば、題目を想定するしないにかかわらず、本稿が第3節で指摘した、「～タと、～テイル・～テオルとでは明確な異りがある」という事実に変わりはない。したがって、いずれにせよ、主格名詞の有情 / 非情に関して、～タと～テイル・～テオルとで傾向が異なっていることは明かであるといえる。

詞にも、次の例にみるように有情/非情の制限はない。

〈主格名詞が有情物の例〉

- (18) まつおまちやれ、きやづがしたは (虎明本・磁石)
(19) 何者があたぞ (虎明本・ぬらぬら)

〈主格名詞が非情物の例〉

- (20) 其内にむしくひが一つござつた (虎明本・栗焼)
(21) 此のほどやわたに、鳥居がたつた、 (虎明本・八幡の前)

このような点から考えても、本稿の結論は妥当であると考えられる。ところで、中世末期日本語の～テアルの主格名詞は、有情物の場合もあれば非情物の場合もあるということがよく知られている。この点において、これまでみてきた～タも、～テアルと同様であるといえる。

本稿では、中世末期日本語の終止法で状態を表している～タには、主格名詞が非情物の場合もあることを指摘した。中世末期日本語のテンス・アスペクト形式に関しては、既に、福嶋 1999、福嶋 2000a、福嶋 2000b、福嶋 2001 等で、～タが已然態を表している場合と～テイル・～テアルが已然態を表している場合とで動詞の分布が異なっていることや、当時の～テイル・～テアルには、「走っている」「歩いている」等の具体的な動きのある進行態の例がほとんど存在しないこと等を指摘し、これらの事実をもとに、当時の時間表現の体系を記述してきた。また、安・福嶋 2001 では、中世末期日本語のアスペクト体系と現代韓国語のアスペクト体系に、ある種の共通性がみられることを指摘した。今後も、このような時間表現に関する研究を進めていきたいと考えている。

〈参考文献〉

- 安 平鎬・福嶋健伸 2001 「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系—アスペクト形式の分布の偏りについて—」(筑波大学『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書』平成 12 年度Ⅳ)
大野 晋 1977 「主格助詞ガの成立 (上) (下)」(『文学』45-6、45-7)

- 尾上圭介・西村義樹 1997「国語学と認知言語学の対話Ⅰ—主語をめぐる—」（『月刊言語』11月号）
- 加賀信広 1994「対比の「は」とベク」（筑波大学『言語文化論集』38）
- 川端善明 1976「用言」（『岩波講座 日本語6 文法Ⅰ』岩波書店）
- 菊地康人 1997「「が」の用法の概観」（『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房）
- 金水 敏 1995「「語りのハ」に関する覚書」（『日本語の主題と取り立て』くろしお出版）
- 金水 敏 1997「現在の存在を表す「いた」について—国語史資料と方言から—」（『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房）
- 金水 敏 2001「文法化と意味—「～おる（よる）」論のために—」（『国文学 解釈と教材の研究』46-2）
- 工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』（ひつじ書房）
- 小林茂之 2000「中世における主格助詞表出の一変化について」（東京大学『國語と國文学』12月号）
- 鈴木 泰 1992『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』（ひつじ書房）
- 高橋敬一 1998『宇治拾遺物語』における「テアリ」について（二）（活水女子大学・短期大学『活水論文集』41）
- 高山百合子 1995「大藏流虎明本・虎寛本に見るアスペクト表現—存続を表す助動詞「た」をめぐる—」（筑紫女学園短期大学『筑紫国文』18）
- 高山百合子 2000「完了辞・過去辞の統合をめぐる—「た」への統合史・素描—」（長崎大学『国語と教育』24号）
- 坪井美樹 1976「近世のテイルとテアル」（『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社）
- 手坂凡子 1999「虎明本狂言のテアルについて」（國學院大學『国語研究』62）
- 野村剛史 1993「古代から中世の「の」と「が」」（『日本語学』10月号）
- 野村剛史 1994「上代語のり・タリについて」（京都大学『國語國文』63-1）
- 野村剛史 1996「ガ・終止形へ」（京都大学『國語國文』65-5）
- 福沢将樹 1997「タリ・リと動詞のアスペクチュアリティー」（『国語学』191）
- 福嶋健伸 1999「中世末期日本語のシタについて—終止法で継続相現在を表す場合を中心に—」（国語学会平成11年度春季大会（於：同志社大学）1999年5月30日発表）

- 福嶋健伸 2000a 「中世末期日本語の～テイル・～テアルについて—動作継続を表している場合を中心に—」(『筑波日本語研究』第五号)
- 福嶋健伸 2000b 「中世末期日本語の基本形について—終止法で現在の状態を表している場合を中心に—」国語学会平成 12 年度春季大会 (於：専修大学) 2000 年 5 月 28 日発表
- 福嶋健伸 2001 「中世末期日本語のウチ (二) 節における～テイルと動詞基本形—状態化形式の文法化をめぐる—」(『筑波日本語研究』第六号)
- 福田嘉一郎 1992 「中世末期口語における～テゴザルと～テゴザッター—中世語動詞のテンス・アスペクト体系の一斑—」(大阪大学『詞林』11)
- 益岡隆志 1992 「日本語の補助動詞構文—構文の意味の研究に向けて—」(『文化言語学 その提言と建設』三省堂)
- 松下大三郎 1928 『改撰標準日本文法』(中文館)
- 安田 章 1981 「『語り』の表現機構—中世の場合—」(『表現研究』34)
- 柳田征司 1987 「近代語「テアル」」(愛媛大学『愛媛国文と教育』19)
- 柳田征司 1990 「近代語の進行態・已然態表現」(『近代語研究』第八集、武蔵野書院)
- 柳田征司 1991 『室町時代語資料による基本語詞の研究』(武蔵野書院)
- 山下和弘 1996 「中世以後のテイルとテアル」(京都大学『國語國文』65-7)
- 湯澤幸吉郎 1929 『室町時代の言語研究』(大岡山書店)(再版『室町時代言語の研究』1955 風間書院)

〈調査資料〉

[用例等を示す場合、表記を変えている場合がある。]

- 池田廣司・北原保雄 校注『大藏虎明本狂言集の研究』上中下巻、表現社、1972・1973・1983 (略称：虎明本) ○江口正弘著『天草版平家物語対照本文及び総索引(本文篇)』、明治書院、1989 (略称：天草版平家物語) ○京都大学文学部国語学国文学研究室編『文禄二年耶蘇会板伊曾保物語本文・翻字・解題・索引』、京都大学国文学会、1963 (略称：天草版伊曾保物語) ○岩淵匡 他編『醒睡笑静嘉堂文庫蔵本文編』、笠間書院、1982 (略称：醒睡笑) ○『きのふはけふの物語』小高敏郎 校注『江戸笑話集』(日本古典文学大系)、岩波書店、1966

【付記】

本稿は、日本学術振興会の研究助成及び平成 13 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

ふくしま たけのぶ／文芸・言語研究科

（2002 年 6 月 27 日 受理）